

【追悼文】

永井克孝先生を偲んで

日本基礎老化学会名誉会員、永井克孝先生が平成 26 年 6 月 23 日に急逝されました。まことに痛惜の念にたえず、ここに謹んで哀悼の意を表します。

先生は新潟県で生を受け、昭和 29 年に東京大学教養学部をご卒業になられ、理学博士と医学博士の二つの博士号を有されております。東京大学伝染病研究所（今の医科学研究所の前身）の助手、東京大学教養学部の助教授を経た後、昭和 49 年東京都老人総合研究所の生化学部長として赴任されました。その後、東京大学医科学研究所教授、同医学部教授、東京都臨床医学総合研究所所長、三菱化学生命科学研究所所長、理化学研究所国際フロンティア研究システムシステム長の要職を務められました。東京大学名誉教授の称号を授与されておられます。

数多くの研究業績を築かれ、特に糖鎖生物学、神経化学に関する生化学的な研究を精力的に推し進められました。糖脂質の生理活性に関する研究や糖鎖を介した細胞外リン酸化酵素の発見など、現在の細胞生物学に大きな影響をもたらした発見をされています。この発見の裏には、研究者にとって一番重要な常人では思い付かないような発想の柔軟さや斬新さがあると思います。私が知己を得たのは東京大学医科学研究所教授時代でしたが、私のような若造にも気さくに声を掛けてくださいました。先生は、研究面では非常に厳しい一方で、普段は大変温厚で、決して他人の悪口や中傷を口にされませんでした。従いまして、教え子以外からも信頼され、尊敬され、なんでも相談にのってくださる方でした。また、先生のご講演には常に研究に対する哲学ともいべき示唆にとんだ奥深い印象を受けておりました。

先生からお聞きした基礎老化学会との思い出を記すことにします。老人研が開設後、研究が進み成果が出てきたのだけれど、その老化研究成果を発表する場がないということで、当時の太田邦夫所長が英断され、日本基礎老化研究会（日本基礎老化学会の前身）が誕生したとのことです。その際、会の英語名が、現在使用されている Japan Society for Biomedical Gerontology に落ち着くまで、medical を入れるかどうか、Aging Research ではどうか、など喧々諤々の議論があったことを、懐かしく話して下さったことを覚えています。

「私は老化研究には期待しているから。」ということを常々話されていました。こうした先生のお言葉を肝に銘じ、今後会員一同研究に邁進することをお誓い申し上げ、改めてご冥福をお祈り申し上げます。

東京都健康長寿医療センター研究所 副所長 遠藤 玉夫